

日本式ローマ字翻字の推薦

(2008-09-28 版)

辻野 匠 (Taqumi TuZino)

2007-12-29 起筆. PDF が正本. HTML は表現できない部分があり, 画像等で辛くも表現して
ゐる.

目次

| | |
|-------------|----|
| I. はじめに | 1 |
| II. 本稿で扱ふ記号 | 5 |
| III. ローマ字表 | 6 |
| IV. 名称について | 11 |
| V. あとがき | 12 |
| VI. 文献 | 12 |
| VII. 代書法 | 13 |

I. はじめに

現在の日本人は新たなローマ字問題に直面してゐる. その問題とは ASCII だけで日本語の固有名詞を正しく表記することである. 日本語をローマ字で表記する機会は増えた. しかし, 無視される正則と省庁縦割の通則と自己流の表記とでローマ字表記は混乱する一方である. 単純に音を表現できればよいといふ naïve な方針では解決しない. 私は, この問題への解決として日本式ローマ字による翻字を推薦する.

最初にローマ字についての歴史を簡単に触れておく. ローマ字は最初, 日本に持ち込まれた時は持ち込んだ外国人が日本語を表記するためのものであった (安土桃山時代や明治時代). それから, 日本人が日本語を表記しようといふ運動があった (ローマ字化運動. 主に明治から終戦まで). この時の代表的なローマ字方式にヘボン式と日本式の二系統あった. ヘボン式は米国人 C.ヘボン氏 (James C.Hepburn) が日本にキリスト教を布教する際に日本語を英字で表記するため

に開発したもので、子音を英語風に母音を伊語風に表記する。現在広く見られるローマ字綴はいづれもヘボン式系統の亜流であるが、道路標識、外務省パスポート、駅名それぞれ独自の表記をしてゐる。一方の日本式は日本人が自然発生的に使つてゐたものを田中館愛橋氏(あるいは田中館。以下、公人と見倣して敬称略)がまとめたもので、ある音がどの音韻(ある言語が同音とみなす音の集合)に属するかによって決定する。具体的には音図(日本語では50音図といひ、音を分析して表にしたもの)に従ひ、行と段にわけて同じ行/段は同じ文字を割当てる。理論的明晰さから寺田寅彦、朝永振一郎など物理学者やトルベツコイ、イエスペリセンのやうに言語学者に支持された。ヘボン式と日本式は議論を重ね、1937年には日本式をベースに四假名を整理した訓令式が内閣から告示された。終戦後の1954年、ヘボン式(及び選に洩れた四假名を含む日本式)を許容する綴りをサブとして容認する訓令式が再度告示された。その後、1937年制訓令式はISO3602として国際規格になる。

ローマ字運動の提唱者たちはローマ字のほうが効率的であり、日本の文明化にはローマ字化が貢献すると考へてゐたらしい。現在、この運動はワープロなどの技術革新によって下火となつた。今日の問題も、日本語を文章としてローマ字表記するといふことではない。問題になつてゐるのは基本的には固有名詞(人名・地名)の表記である。

もっとも大きく問題になるのは長音表記である。現在の地名や人名表記では長音符省略されてゐる(ただし、駅名では長音符が表記される)。この表記法では浩三と小僧と去年(こぞ)を区別できない(三者とも kozo)。明治時代にローマ字が輸入された時のオリジナルのヘボン式では kōzō/kozō/kozo のやうに書きわけられてゐた。その後、田中館愛橋の日本式でも kōzō/kozō/kozo と書きわけられてゐた。「 $\bar{\quad}$ 」(マクロン)や「 $\hat{\quad}$ 」(シルコムフレックス)を長音符と呼ぶ。この長音符は英語表記(たとへば英字新聞)では省略されてゐる。理由は明確ではないが、俗説では英米人が長音を理解できないからといはれてゐる。現在では日本人が固有名詞をローマ字表記する時でさへ長音符を省略してゐる。それは英米人が長音符を省略してゐるのに倣つてゐるのかもしれないが、自分から省略する必要はないと私は考へる。

長音符省略にはもうひとつ、運用上の理由がある。英語の出版界では長音符の印字が困難だといふ理由である。ASCIIつまり英語で使ふラテン文字と数字であれば印刷が簡単である。ここではこれを「ASCIIの呪い(ひ)」といふことにする。たとへば、パソコンでファイル名をローマ字で書きたい時に長音符は表現できない。

このやうに計算機(パソコンを含む)ではASCIIしか通さない事態がある(大型計算機ではEBCDICとふ規格もあるが英字しか使へないことではASCIIと同じである)。身近な例でも、パソコンがトラブルを起して日本語処理機能が壊れた時には日本語メッセージが全て意味不明な記号に文字化けする。パソコンが健康な時であつても、違ふシステムで作成されたファイル名の日本語が文字化けすることがある。さういふ時には英数字だけが読める文字である(それがASCII)。同様にドイツ語のHütteのやうなü(uウムライト)かフランス語のCôteのやうなô(オシルコムフレックス)はアルファベットには違ひないが、英字ではない(正確には、ASCIIではない)ので化けてしまふ。日本のパスポートの名前にしてもさうだ。ローマ字の正統な表記では「大野」はÔnoまたはŌnoであるが、ÔもŌもASCIIでないのでOnoになつてしまふ。上述のkozo=浩三/小僧もさうだし、kosaku=耕作/小作、odori=大通り/踊り、Sogo=そごう/齟齬、と枚挙に暇がない。

ここで問題になつてゐるのは長音符を使はずにローマ字する方法である。幸ひにそれは可能である。スリランカ語やベトナム語のやうに字音符(上のüやô, é, çなどアルファベットに付加さ

れるもので長音符や変音符を意味する。概念としては日本語の濁点に近い)が非常に大量にあるものでは ASCII では満足な表記はできない。そのような言語ではどうやっても省略して表記するしか方法はない。しかし、日本語の音韻構造は単純でローマ字 26 文字といふ限りある資源で表記することが十分可能である。これまでも「浩三」を表音的に Koozoo のように長音符を使わずに ASCII だけで表記する方法が考案されてきた。しかし、この方法は人気がない。これは同母音連続を嫌ったためと考へられる。更に、英語では oo は /u/ のように発音されることを嫌ったためもあるだろう (とはいふものの、佐藤を Sato と表記すると英語では [seito] 「セイト」となってしまうがこれを嫌ふことはほとんどない。英語でサトウとふ発音を実現するためには Sutto とでもすべきだが、さうする人はほとんどゐない。このように英語で変な呼みになることを嫌ふといふ指向には一貫性がない)。世界的には oo のように同母音連続は奇妙ではなく、ヨーロッパの言語に限ってもオランダ語 (boot/ボート/船。英語の boat) やフィンランド語 (koota/コータ/集める) に認められる。

これまでのローマ字法で提唱されてきた方法はいづれにしても表音主義といふ範疇にあり、音を表現するローマ字であった。しかし、一方で翻字法といふ方法もある。キリル文字の P はラテン文字では R だから R、同じく B は V だから V と文字を文字で置き換へる方法である。この方法では、たとへば語末の B は発音としては V ではなく W の発音になるとしても V で表記するのである。これにより表音性からは若干逸脱するが文字体系の構造は保存されることから科学的な表記法といはれる (Kadmon, 2000)。日本語では假名を逐次、ローマ字になほすのを翻字といふ。たとへば浩三「こうぞう」を Kouzou と表記するのがそれだ。

今、筆者が推薦する基本的な方針は翻字方式である。翻字式なので長音といふ概念はない。ローマ字は第一目的として音を表現するためのものではなくて假名を表現するためのものであると規定する。音を表現することは第一目的ではないだけで音を表現してはいけないといふ意味ではない。

なぜ翻字か？私達にとって重要なのは単なる発音ではなくて、假名としてどう表記するかである。私達は新カナでさへ、逢坂と大阪を「おうさか」と「おおさか」と書きわける。更に、自分たちの子供のことを鑑みた場合、ローマ字標識は假名を翻字してゐるほうが望ましい (鏡味, 1997)。道路標識や駅名は外国人のものだからと表音指向で作られてゐる (表音的ではない場合もある。たとへば「三条」は表音的には Sanjō であるが、道路標識の Sanjo のように長音符を省略したものは表音的ときへ云ひがたい。また翻字にしても外国人には影響はない=後述)。しかし、標識や駅名は子供が文字—特に漢字—を覚えるのに絶好の機会を提供してゐるのである。子供はしばしば電車や車の中から看板や標識をさがして、漢字を覚える。表音的なローマ字綴でも子供が読み方を知るのに役に立つが、日本語では読み方を表現するのは読み仮名である。「大阪」「逢坂」のやうに同じオーの音であっても読み仮名が異なる場合がある。そのような違ひは日本語の歴史性に由来する。もし日本の文化を破壊したい場合は破棄しても構はないだろうが、文化を伝承しようとした場合は歴史性の継承が原則となる。その際には表音的表記よりも假名を翻字する表記のほうが都合がよい。

現在のローマ字表は四假名といはれる「ジヂ」「ズヅ」をそれぞれ同音と見なして書きわけないし、「ゐ」「ゑ」についても表現する方法がない。これは日本の古典の固有名詞をローマ字表記できないことを意味してゐる。明治時代に田中館愛橋が提唱した日本式ではそれらを書きわけることができた。私が推奨するのは、まさにこの方法である。正確には ISO3602 の厳密翻字と

いふ¹。

私自身は復古假名遣(いはゆる旧カナ・歴史的假名遣、どちらの名称も曖昧であるため復古假名遣と称す、個人的には「とこしへの假名遣」を僭称する)を歴史性と合理性から日本語の正統な表記として支持してゐるし、本ローマ字の説明においても四假名や「ゐゑ」など復古假名遣についての記述に重きを置いてゐるが、本・日本式ローマ字方式は現代仮名ずかい(当用仮名ずかい(笑))や江戸時代の間違った假名遣(たとへば「うれしひ」)にも対応してゐる。假名遣からは独立してゐる。対応できないのは変体假名²と上代特殊假名遣である。

なほ、外国人のための地名人名の表記は労多くして実り少ない。ローマ字で書きさへすれば世界中の人が自分の名前を正確に発音してくれるだらうといふのは無知ゆゑの錯覚である。ラテン文字を使用する言語の話者は与へられたローマ字綴を自分たちのローマ字読みで読むのが自然である(たとへば、伊達/Dateは英語話者なら[deit]デイトと読むだらうし、町田/Machidaだつて[mac haida]マックハエダ、日立/Hitachiだつて[hai tac hai]ハイタックハイかもしれない。スペイン語話者なら城島 Jojima は[xoʝima]ホヒーマになるだらう。かはいさうなのは純/Junで、[xun/xũ]つまり、フンになってしまふ。ちなみにドイツ語で読むとユンになる)。どのやうなローマ字方式であらうと通りすがりの旅行者に覚えてもらふのは難しい。強いて望むなら、素直なローマ字方式である。英語に近いからとかといふ理由でヘボン式を推薦することは私にはできない。なぜか、端的にいへば英語を基準にする理由がないためである。英語には英語の歴史があり、それは尊重すべきものである。そして英語の歴史上の変化を尊重するなら、それによって生じた特殊な綴字の読み方を無批判に導入することは英語特有の個人的事情を別の文化の標準にしてしまふ間違ひがある。それに英語は歴史性ゆゑ、表記と音が複雑になってをり、基準にするにはふさはしくない。さらにヘボン式では子音の表記は英語式(風?)であるが、母音の表記は伊語式である。このやうに扱れた表記ではなく、素直な表記が望ましい。

また、翻字式にしても外国人には影響がない。外国人は素直にローマ字を規則にしたがつて読みさへすればよい。コ・ウ・ゾ・ウと活舌よく発音すれば「浩三」のことだと理解してもらへる(もつとも活舌よく話すことが英語話者にはむづかしい。活舌では、まだ仏語や独語話者のはうがましだ)。たとへ Matida マ・ティ・ダと発音しても、「マチダ」のことだとわかる(ただし、アメリカ英語のやうにマリダと発音されるとわからない)。復古假名遣翻字にすれば、むしろ認知性が高まるだらう。それは日本人の側が音と字といふものを幅をもって理解できるやうになるためである。復古假名遣翻字であれば三条を「さんでう」と書いてサンジョーと読むため、表音主義であれば deu を綴ればデウとしか読めない狭い発想のところをジョーといふ音もあると認知の幅が広がる。それは英語のやうに綴りと発音の関係を悪戯に混乱させるものではなくて、むしろフランス語に近い。フランス語では綴り方と発音が不規則に見えるが、フランス語を知るものにとっては一意に発音が決定される。本方式も日本語を知り復古假名遣を多少知ってゐるものならば正確な現代音を曖昧さなく再現できる。

¹あとから知つたが、南部義壽(よしかず)氏が明治2年に提唱したローマ字に近い。また、黒川眞頼が明治5年に百人一首をローマ字で翻字したものと酷似してゐる

²変体假名は重要で、単なる遊び以上の実用的価値もあつた。たとへば語頭と語中とで同音の仮名を違へることによって語句の切れ目を明確にした。また定家假名遣では「を」と「お」と「越」といふ仮名を使ひわけてゐた。さういふ表記も書きわけられたほうがよいが、ここでは断念した。

II. 本稿で扱ふ記号

本稿で扱ふ記号には IPA(International Phonetic Alphabet: 国際音声記号) など印刷や計算機で取り扱ふのに特別なソフトウェアを必要になる。そこで、ここでは巻末に示す代書法で表記することにする。

なほ、IPA では [j] はジャではなくヤ行の頭子音である。また、[u] は円唇後舌狭母音で英語仏語の u である。標準的な日本語のウはこれとは若干異なり平唇の後舌狭母音であるが、完全に平唇でもなく平唇と円唇の間の広い範囲を指す。関西では特に円唇が強い。ここでは円唇も平唇も区別せず、u で示す。ツやチのやうな破擦音は IPA では合字で示すか、tie-bar で二文字を連結しなければいけない ($\hat{t}s$)。代書法では tie-bar で連結したが、しばしば省略されることが多い。有声両唇摩擦音 [β] は日本語では独立の音韻をなさず、語中のバ行の異音である。

III. ローマ字表

√ 直音 (開口呼)

| 行 \ 段 | ア/a/ | イ/i/ | ウ/u/ | エ/e/ | オ/o/ |
|-------|------|------|------|--------|------|
| ア行/ʼ/ | あ a | い i | う u | え e | お o |
| カ行/k/ | か ka | き ki | く ku | け ke | こ ko |
| サ行/s/ | さ sa | し si | す su | せ se | そ so |
| タ行/t/ | た ta | ち ti | つ tu | て te | と to |
| ナ行/n/ | な na | に ni | ぬ nu | ね ne | の no |
| ハ行/h/ | は ha | ひ hi | ふ hu | へ he | ほ ho |
| マ行/m/ | ま ma | み mi | む mu | め me | も mo |
| ヤ行/y/ | や ya | — | ゆ yu | (イエ)ye | よ yo |
| ラ行/r/ | ら ra | り ri | る ru | れ re | ろ ro |
| ワ行/w/ | わ wa | ゐ wi | — | ゑ we | を wo |
| ガ行/g/ | が ga | ぎ gi | ぐ gu | げ ge | ご go |
| ザ行/z/ | ざ za | じ zi | ず zu | ぜ ze | ぞ zo |
| ダ行/d/ | だ da | ぢ di | づ du | で de | ど do |
| バ行/b/ | ば ba | び bi | ぶ bu | べ be | ぼ bo |
| パ行/p/ | ぱ pa | ぴ pi | ぷ pu | ぺ pe | ぽ po |

√ 開拗音 (齊口呼, 硬口蓋化音)

| 行 \ 段 | ア/a/ | イ/i/ | ウ/u/ | エ/e/ | オ/o/ |
|---------------|--------|------|--------|--------|--------|
| カ行/k/[kʲ] | きゃ kya | — | きゅ kyu | きえ kye | きよ kyo |
| サ行/s/[sʰ] | しゃ sya | — | しゅ syu | しえ sye | しよ syo |
| タ行/t/[tʰ] | ちゃ tya | — | ちゅ tyu | ちえ tye | ちよ tyo |
| ナ行/n/[nʰ] | にゃ nya | — | にゅ nyu | にえ nye | によ nyo |
| ハ行/h/[xʰ] | ひゃ hya | — | ひゅ hyu | ひえ hye | ひよ hyo |
| マ行/m/[mʲ] | みゃ mya | — | みゅ myu | みえ mye | みよ myo |
| ラ行/r/[rʲ] | りゃ rya | — | りゅ ryu | りえ rye | りよ ryo |
| ガ行/g/[gʲ] | ぎゃ gya | — | ぎゅ gyu | ぎえ gye | ぎよ gyo |
| ザ行/z/[dzʰ/zʰ] | じゃ zya | — | じゅ zyu | じえ zye | じよ zyo |
| ダ行/d/[dzʰ/zʰ] | ぢゃ dya | — | ぢゅ dyu | ぢえ dye | ぢよ dyo |
| バ行/b/[bʲ] | びゃ bya | — | びゅ byu | びえ bye | びよ byo |
| パ行/p/[pʲ] | ぴゃ pya | — | ぴゅ pyu | ぴえ pye | ぴよ pyo |

√ 合拗音 (合口呼, 円唇化音) †

| 行 \ 段 | ア/a/ | イ/i/ | ウ/u/ | エ/e/ | オ/o/ |
|--------------------------|--------|--------|------|--------|--------|
| カ行/k/[k ^w] | くわ kwa | くる kwi | — | くゑ kwe | くお kwo |
| サ行/s/[s ^w] | すわ swa | する swi | — | すゑ swe | すお swo |
| タ行/t/[t ^s] | つわ twa | つる twi | — | つゑ twe | つお two |
| ナ行/n/[n ^w] | ぬわ nwa | ぬる nwi | — | ぬゑ nwe | ぬお nwo |
| ハ行/h/[h ^w /Φ] | ふわ hwa | ふる hwi | — | ふゑ hwe | ふお hwo |
| マ行/m/[m ^w] | むわ mwa | むる mwi | — | むゑ mwe | むお mwo |
| ラ行/r/[r ^w] | るわ rwa | るる rwi | — | るゑ rwe | るお rwo |
| ガ行/g/[g ^w] | ぐわ gwa | ぐる gwi | — | ぐゑ gwe | ぐお gwo |
| ザ行/z/[z ^w] | ずわ zwa | ずる zwi | — | ずゑ zwe | ずお zwo |
| ダ行/d/[d ^z c] | づわ dwa | づる dwi | — | づゑ dwe | づお dwo |
| バ行/b/[b ^w] | ぶわ bwa | ぶる bwi | — | ぶゑ bwe | ぶお bwo |
| パ行/p/[p ^w] | ぷわ pwa | ぷる pwi | — | ぷゑ pwe | ぷお pwo |

√ 特殊音 †

| 行 \ 段 | ア/a/ | イ/i/ | ウ/u/ | エ/e/ | オ/o/ |
|----------------|--------|--------|--------|--------|--------|
| サ行/s/[s] | — | スイ s"i | — | — | — |
| タ行/t/[t] | — | テイ t"i | トウ t"u | — | — |
| ナ行/n/[n] | — | ヌイ n"i | — | — | — |
| ハ行/h/[h] | — | ヘイ h"i | ホウ h"o | — | — |
| ザ行/z/[z] | — | ズイ z"i | — | — | — |
| ダ行/d/[d] | — | デイ d"i | ドウ d"u | — | — |
| * バ行/b/[b/β/v] | ヴァ va | ヴィ vi | ヴ vu | ヴェ ve | ヴォ vo |
| * ブア行/β/[β] | ブア va | ブイ vi | ブ vu | ブエ ve | ブオ vo |
| ウヅ行/w/[w] | ウヅ wwa | ウヅ wwi | — | ウヅ wwe | ウヅ wwo |

√ 特殊音の拗音 †

| 行 \ 段 | ア/a/ | イ/i/ | ウ/u/ | エ/e/ | オ/o/ |
|------------------------|---------|---------|---------|---------|---------|
| タ行/t/[t ^j] | テヤ t"ya | — | テユ t"yu | テエ t"ye | テヨ t"yo |
| タ行/t/[t ^w] | トワ t"wa | トヰ t"wi | — | トエ t"we | トヲ t"wo |
| ナ行/n/[n ^j] | ネヤ n"ya | — | ネユ n"yu | ネエ n"ye | ネヨ n"yo |
| ナ行/n/[n ^w] | ヌワ n"wa | ヌヰ n"wi | — | ヌエ n"we | ヌヲ n"wo |
| ハ行/h/[h ^j] | ヘヤ h"ya | — | ヘユ h"yu | ヘエ h"ye | ヘヨ h"yo |
| ハ行/h/[h ^w] | ホワ h"wa | ホヰ h"wi | — | ホエ h"we | ホヲ h"wo |
| ダ行/d/[d ^j] | デヤ d"ya | — | デユ d"yu | デエ d"ye | デヨ d"yo |
| ダ行/d/[d ^w] | ドワ d"wa | ドヰ d"wi | — | ドエ d"we | ドヲ d"wo |

√ 撥音・促音等

撥音「ん」音素/ n /は常に n で示す。「ん」の後に母音、半母音が来る時は、「 \prime 」で区切る(例. 健一 ken'iti. 翻訳 hon'yaku). 促音は子音を重ねて示す(例. いった. itta). † どうしても表音的にしたい場合は, [...] や '...' で括る. † 外来語をそのまま書く場合は, '...' や斜体にする。「あっ」「えっ」のやうな語末が促音になるものは, att, ett と t の重子音で表す. これは鏡味(1997)の提案を採用したものである.

註

音韻表記・発音表記は現代の標準的な音韻・発音を示した。「*」は実際の音韻としては存在しない仮想的な表記である。「†」は本来の日本式では定義されてゐない, 本稿独自の拡張である.

直音

「—」は理論的に存在しえない字/音である.

ye は現代仮名使いはもちろんのこと復古假名遣においても存在しない字である. ye は假名が成立する前にア行の「え」に同化した. もしこれを強ひて字を当てれば「いえ」となる. 萬葉假名では, 「江」「曳」「要」「延」「兄」「枝」が当てられてゐる. 平仮名の「え」は「衣」の草書に由来し音韻論的にはア段の e である. 一方, 片仮名の「エ」は「江」の傍に由来しヤ行の ye である. この表記が成立した時, 既に e と ye が混乱してゐたことがわかる. これを書きわける際は, 平仮名の ye は「イ」と「エ」の合字や「江」で代用する方法が提案されてゐる. 片仮名の e は, 衣の冠だけ抜粋して「𠂔」とする方法が考へられる. 学術的研究は別として正書法としての復古假名遣では e と ye を区別しないので, これらの表記は古文の翻字など純粹に学術的なものに限られる. ローマ字が理論的に ye の存在を保証してゐるため転記表を用意した.

異化した音

標準とされる発音のうち, 行を規定する音声学的音から異化したものは下記のとほり; 「し」/si/は $[s^c]$, 「ち」/ti/は $[\widehat{ts}^c i]$, 「つ」/tu/は $[\widehat{tsu}]$, 「ひ」/hi/は $[\zeta i]$, 「ふ」/hu/は $[\Phi u]$, 「に」/ni/は $[\widehat{n}]$ をそれぞれ子音として持つてゐる.

シ

現在の日本語で標準とされる発音では「し」/si/は $[s^c]$ を子音として持つとされるが巷間においては $[s]$ を子音にすることも多い(敢てカナ書きすれば「スイ」と同じ音). しかも, サ行それ自体が人によっては $[s]$ 一本であったり, $[\theta]$ であったりする. たとへば, 私はサ行を $[\theta]$ として発音してゐる(らしい. 音声を診断する機械により知つた. サ行が $[\theta]$ の人が多くなつてゐると大野 晋が指摘してゐる). $[s]$ は意識しないと無理で, $[\zeta]$ は頑張つて可能. $[\zeta]$ (esh, sheet の sh) は(機械の診断によれば)今のところ発音できない. また, 「せ」/se/については $[s^c]$ を子音をする方言もある(古語の発音が保存されてゐる). このやうに揺らいだ表記を統一的に表現するのは si である.

ガ行, ザ行, ダ行

現在の日本語の標準とされる発音では、ガ行子音はガ行鼻濁音 [g̃] を異音として持つ。標準とされる発音では鼻濁音は語中にのみ表はれる。ザ行子音は破擦音 ([dz̃] など) のほうが主流で摩擦音 ([z] など) を異音として持つ。更に、'標準発音' では、「じ」と「ぢ」は [ds̃^c] または [z^c] の子音を持ち、「ず」「づ」は [dz̃] または [z] の子音を持つ。

「ヂ」を di, 「ヅ」を du とふ表記は特に英語 (だけ) に親しい人には違和感がある。歴史的にヘボン式支持者はこの綴りに憎悪に近いものを表明してきた。しかし、表記に違和感があるからといって、これを dji とか dzu とすると日本語の音韻体系の表記そのものに破綻を来す (なほ、私にはヂを di, ヅを du としても違和感はない/音韻・表意・歴史の観点から/し、dji,dzu としても違和感はない/単なる音声表記として/)。「三条」は復古假名遣では「サンデウ」となり、それを日本式ローマ字で翻字すると Sandeu となる。発音としてはエウは現代語ではヨー [jo:] のやうに音韻変化した (丁度、ラテン語で Europa エウロパが英語では europe ユアラープになったやうに) ので、sandeu は [sandjo:] となった。後に [djo:] が硬口蓋化により [dʲo:], [dz̃^co:] となった。これは一連の歴史である。もし、ヂを英語の音価にあふからといって ji[d̃zi] で書く例外を導入すれば、di はデイ、dyo はデョを表はすことになるだらう。しかし、deu はどうなる? 歴史的経緯によれば deu は dyō [dʲo:] を経て [ds̃^co:] になった。この過程における dyō は現代語の音韻ではヂョーであるのに、表記ではデョーを表はすことになってしまふ。例外を導入することにより表記全体の混乱が生じる。これは言語が内部に自律的構造をもっているためである。つまり、「ヂ」「ヅ」はなにも今の音を示してあるだけの存在ではない。歴史をもっている。それは単に書物に書かれた歴史だけでなく私達の言葉に歴史は埋め込まれてある。なほ、私は復古假名遣を支持する個人的理由のひとつは、復古假名遣は言葉が歴史的存在であり、自分もその一部であることを想起さしめるためである。また、英語ですら di は一概に [di] といふわけではない。たとへば cordial は [ko@^rd̃z@] となる。

特殊音「スイ」「ティ」「トゥ」

ヘボン式支持者が日本式系統を批判する際にしばしば「スイ」「ティ」「トゥ」の表記を例に出される。ヘボン式ではそれぞれ si,ti,tu と表現できるが、日本式系統では、それらは「シ」「チ」「ツ」を意味する。ここでは母音の影響を受けない子音の音を「[~]」を用いることを提唱する。これはキリル文字のラテン文字翻字の硬音 (非硬口蓋化音) を翻字する際の記号をそのまま援用した。計算機の処理 (プログラム) 上「[~]」は適当な文字とはいひがたいが、実際はエスケープしきへすれば処理上も支障ない。他にも「[~]」と使ふ方法が提唱されてあるが、これは分節記号に使用されてをり、同じ記号に複数の意味をもたせることは混乱を招くため、ここでは採用しない。

なほ、スイやトゥといふ仮名表記について追記する。一般にスイは [si] の音声を指示してあると考へられてをり、上でもそのやうに扱ったが、実はそれは勘違ひである。「スイ」は現代仮名ずかいに従ってある限り、[s^wi] と [si] のどちらも表し得る。復古

假名遣であれば、[s^wi] はスヰ、[si] はスイと書き分けられる。現在の日本語においては [si] と [s^wi] は別の音韻と見做されてゐない。[s^wi] を厳密に現代仮名遣いで表記したい場合、「スイ」(例、スイッチ) と表記されることもある。その場合は [sui] との辨別が不可能になる。表記の上でも音韻の上でも「スイ」は混乱の最中にある。また、スウォッチ (swatch) のやうな例もある。同様にトゥも実際には指示対象となる音韻がはっきりしてゐない表記の一つである。[tu], [t^wu], [tou] の3通りある。スイと同じく、[tu] と [t^wu] は現代仮名ずかいで表記してゐる場合は辨別できないし、おそらく別の音韻とは考へられてゐないだらう。[tou] はトにウを軽く沿へる音で、トゥシューズなどに例が見られる。これはフランス語から仮名転記すればトウなるはずであるが、トウだと2音節になり原語の1音節から乖離するためなのか、「トゥ」と表記されることが多い。この小文字の「ウ」は「そうね」などにも見られる。このやうに特殊音は注意が必要である。

特殊音「ウィ」行

ウィ行は音韻としては原理的にはワ行と同じはずだが、ワ行がア段以外はア行に収斂したのに対してウィ行はワ行の頭子音 [w] を保持してをり、音価として違ふものになってゐる。假名としてワ行は復古仮名遣で用ゐられてをり、ウィ行は外来語の表記に使ひ分けられてゐる。ここでは假名を書きわけ、音価の違いも表現するといふ視点に立って、ww と重ね字 (digraph) する。スイが [si] なのか [s^wi] なのか、それとも [sui] なのかははっきりしなかつたやうに、ウィもはっきりしない表記である。たとへば、ウィスキーはウイスキー [uisuki] とかキスキー [wisuki] なのか人それぞれである。明治大正期にはウキスキーとさへ表記された。ウィを重ね字で表記したのは、これはワ行の合拗音と解釈したためである。

特殊音「ヴ」行

外来語の表記(例：ヴァイオリン)等で「ヴ」行が設定されてゐるが、多くの日本語話者は有声唇歯摩擦音 [v] を発音できずに、有声両唇音の摩擦音 [β] か破裂音 [b] として発音してゐる。翻字のためには必要であるが音声学的な実体はともなはない(参考*ブ行)。英語風に気取って云ふ人の多くは [β] である。意識せずに云ふと多くは [b] になる。[β] も [b] も中世から現代の日本語では /b/ の異音である。ガ行鼻濁音と同じく [β] は語中にのみ表はれる。

特殊音の拗音・小書きのカナ

理論的には特殊音の拗音も成立する余地があるが、日本語として辨別され得ないものも多く、假名書きも実際にはあやしい。

大きい假名に小さい假名を組合せる一種の反切法によつて、日本語として有りえない假名表記も可能である。たとへば「ハエ(海?)」などは実際には該当する発音が日本語ではないにも関はず表記それ自身は可能だ。このやうな假名を翻字することは

できない(強ひて表記すれば hæ). 翻字は単音ごとまたは音節ごとが原則で、「ハエ」で一音節であり、単音は「ハ」の前半で一つ、「ハ」の後半+「エ」で一つであるから「ハ」と「エ」と分けて翻字することはできない. この表記に従へばカエサル(Cæsar)はカエサルとカナ書きしなければならず、強ひてローマ字にすると Kæsarū となる. レントゲン/Röntgen はロエントゲンとなり、それを翻字すれば roentogen). この方法は日本語表記の新しい可能性を提示してゐるが、もともと日本語の音韻ではないので本ローマ字表記としては基本的には対象外とする. 第一に、正則から外れた表記の欠陥をローマ字で解消することは不可能である. 第二に、わざわざ外来語の無理な表記を制定したとしても運用に問題がある(理解できない). 第三に、伝えるべきは語(意)であつて音でも字でもないのだから、原則的には外来語は元の言語の綴を採用してイタリックまたは約物で包むこととする. 例へば「森ビル」なら Mori *build.* といふ風に. それで用が足りてほしいが、逐次に翻字しなければいけない場合(計算機による処理や假名それ自身の翻字)にも対応したい. たとへば Tiersma といふ人がフリジア語文法を書き、それが翻訳されたとする. 原題は Fryske Grammatika であるが原題とは別に邦訳されたもののタイトルをローマ字で(日本語として)表記しなければいけないことがある. その時に翻訳者がタイトルを「フリジア語文法」とし原著者を「ティアスマ」と假名書きした場合、どうすればよいのだろうか? 最初に断はっておくが、訳者はなるべく原音に近いやうにと努めたのだらう—ティアは二重母音一モーラを表記するアクロバティックな試みであるが二重母音は日本語の音韻ではない. 日本語ではティアと二モーラになるだらう. さうではなければ Take-out がテイクアウトに假名書きされてゐる(本来はティクだがティは [ti] で予約ずみで使へない). テヤといふ音韻だったら日本語の音韻の範疇にある(チャの異音. 1モーラ). これのつもりなのか? とかく外来語の転写には繁雑さと不合理がつきまとふ(ティア, テヤとティアの違ひは?). ともかく、本稿ではそのやうな場合、小書きの「アイウエオ」を「\a \i \u \e \o」で示すことを提案する. ただし、これは今ある ISO 規格にはないもので、更なる検討が必要である. 計算機上で日本語変換を受けもつ IME では「\」ではなく、x や l が使はれてゐるが本稿では採用しない. xl の方法ではアルファベットだけで小書きが表現できて計算機処理上は機能的である(がゆゑに IME で採用されてゐる)が、音価として解釈不能なアルファベットを充当することは読み手の原則(Kadmon, 2000)に反するためである. 「\」は記号なので知らない人は理解しないだけで誤解する間違ひがない. この方法に従へば、「ハエ」ha\e, 「カエサル」Ka\esaru, 「ロエントゲン」は Ro\entogen となる. フリジア語文法は「Hurizi\aGo BunPou」作者「T"i\asuma」となる.

IV. 名称について

この日本式ローマ字翻字は基本的には田中館愛橘の日本式とその発展形である ISO3602 の厳密翻字に基づくもので、それ以上のものはほとんどないが、ほとんどないなりにも若干の拡張がある. したがって、これは「拡張日本式ローマ字」とでも呼ぶことができるかもしれない(英訳すれば、X-Japan Style?(笑)). しかし、これまで日本式ローマ字には複数の論者によっていくつ

かの拡張が提案されてきてゐる(たとへば99式, 海津式, 竜岡式など). それらは基本的には田中館愛橋のローマ字の精神を伝えてをり, これらの日本式系統のローマ字を「拡張日本式系統」あるいは「拡張日本式群」として一括するのはいい. ただし, 拡張日本式ローマ字系統にも, それなりにバリエーションがあり, 区別して取り扱ふことが必要である. 本稿のローマ字案も, 語末促音の「あっ」att, 外来音の「ティ」t"i など独自の拡張があり, これらと相違する部分があるので, 精密な考察のため本稿のローマ字も独自の識別名をもつ必要がある.

まづ最初に思ひつくのは「愛橋式」であつたが, これは畏れ多い. また, ご本人が提案したわけではなく, 辻野の独自の拡張が入つてゐるので, この名称は不適當である. が, これは田中館愛橋のローマ字の延長線上にあるといふことで, 田中館愛橋の故地である岩手県二戸郡福岡の属する南部地方に敬意を表して, 「南部式ローマ字」と称することとする. これは同時に南部義籌氏への敬意も含まれる.

V. あとがき

個人的に日本式ローマ字翻字そして復古假名遣(とこしへの假名遣)を支持する理由の第一は「美しさ」である. とはいふものの「美しさ」はある程度は人によりけりで, 「美しい」と思ふ人には説得力をもつが, さうでない人はさう思はないだけなので, 本稿では特にローマ字について, 「美しい」以上の根拠をつけて推薦と提案を行なつた.

VI. 文献

Kadomon, Naftali (2000) Toponymy -The Lore, Laws and Language of Geographical Names. Vantage Press. 333p. 邦訳ナフタリ・カドモン(2004)地名学 地名の知識・法律・言語. 国土地理院技術資料. (財)日本地図センター. 388頁.

鏡味 明克(1997)日本の地名標識におけるローマ字表記の問題点. 三重大学教育学部紀要. v. 48. 1-7.

辻野 匠(2007)アルファベットと発音(2007-12-26版)117頁. オンラインドキュメント.

TuZino, T(2007)Transcription and Transliteration for the Cyrillic. 1p. online document.

辻野 匠(2007)勝手なギリシャ文字翻字. 4頁. オンラインドキュメント.

VII. 代書法

| IPA | 代書 | 音名 (無=無声, 有=有声) | 説明 |
|-----|-------------------------|-----------------|--------------------------------------|
| u | ω/M | 平唇後舌狭母音 | 標準的な「ウ」の母音. |
| ə | @ | 中央中舌母音 | Schwa, いはゆる曖昧母音. |
| ŋ | g̃/ng̃ | 軟口蓋鼻音 | いはゆるガ行鼻濁音. song の ng. |
| ɴ | N | 口蓋垂鼻音 | 語末のン. 一休さんの「ん」. |
| ʃ | š/S | 硬口蓋歯茎摩擦音 (無) | esh. 英語 sheet の sh. 仏語 châteaux の ch |
| ç | s ^c /ṣ | 歯茎硬口蓋摩擦音 (無) | curly-tail C. 標準的な「シ」の子音 |
| θ | θ | 歯摩擦音 (無) | 英語 thank の th. |
| tʃ | t̃s̃/č/t̃S̃ | 硬口蓋歯茎破擦音 (無) | [t̃s̃] の硬口蓋化音 英語 church の ch |
| tʃ | t̃s̃ ^c /t̃s̃ | 歯茎硬口蓋破擦音 (無) | 標準的な「チ」の子音. |
| ʒ | ž/Z | 硬口蓋歯茎摩擦音 (有) | yogh. 英語 pleasure の s. 仏語 Jean の j. |
| ʒ | z ^c /ẓ | 歯茎硬口蓋摩擦音 (有) | curly-tail Z. 標準的な語中の「ジ」の子音 (例「工事」). |
| dʒ | d̃ž/d̃Z̃ | 硬口蓋歯茎破擦音 (有) | [d̃ž] の硬口蓋化音. 英語 John の j |
| dʒ | d̃z̃ ^c /d̃z̃ | 歯茎硬口蓋破擦音 (有) | 標準的な語頭の「ジ」の子音 (「自信」の「ジ」). |
| ɲ | ñ | 歯茎硬口蓋鼻音 | 標準的な「ニ」の子音. |
| ç | ṣ̌/ç̣/C | 硬口蓋摩擦音 (有) | 標準的な「ヒ」の子音. |
| ɸ | Φ | 両唇摩擦音 (無) | 標準的な「フ」の子音. |
| β | β/B | 両唇摩擦音 (有) | 語中のバ行の子音. サバのバ. |
| r | r | 歯茎弾き音 | 標準的なラ行の子音. 米語 water の t, tanner の n. |